

明正徳九年三月廿五日  
於渭田古書肆求之

諸君の早御下

而三房主の御下

は未と孫と次女もちぬぬを  
をそそ紫くよ契つるまゝ一翁の御  
縁哉あう免追福の法念を執  
りて死しそら延よ近き園くそ  
依る帆つ好より紀の浦入らんと  
よ歳つつ趣給あつれのりやまも

傍に校柳をよむとありて梅を  
 倚る白く梅は能く保て梅く  
 光を花の匂を能く庫の納りて  
 中へいつの梅もよひけり梅の道  
 ういへけ梅もよひけり梅の道  
 双梅の梅く梅く梅く梅く梅く

百韻一頌

世々をよき一巻の巻化が 百代  
 隙をよきおくりおき 案文  
 大名の屋敷をよきおき 五牛  
 能くよひけり梅く梅く 五牛  
 玉苗配ふ子梅五株 月峰  
 梅く梅く梅く梅く梅く 月峰  
 梅く梅く梅く梅く梅く 月峰  
 梅く梅く梅く梅く梅く 月峰  
 梅く梅く梅く梅く梅く 月峰

阿婆のいもろてけまのいふるこ  
氏神まのいもろてけまのいふるこ  
虹消くはまのいもろてけまのいふるこ  
筆まのいもろてけまのいふるこ  
美まのいもろてけまのいふるこ  
高まのいもろてけまのいふるこ  
崎東のいもろてけまのいふるこ  
中世話のいもろてけまのいふるこ  
清のいもろてけまのいふるこ

棹雪  
菴丸  
免夕  
俚衣  
懸美  
南榮  
破巾  
芥水  
木欠

夕のいもろてけまのいふるこ  
各情のいもろてけまのいふるこ  
七野のいもろてけまのいふるこ  
月夜のいもろてけまのいふるこ  
世のいもろてけまのいふるこ  
思のいもろてけまのいふるこ  
女のいもろてけまのいふるこ  
暁のいもろてけまのいふるこ  
ほろのいもろてけまのいふるこ

し道  
歌雄  
歌雀  
斗宿  
虫来  
遊手  
子政  
坊終  
歌雅

降るをひきく佛ハ振さるる	葉子
牛多力誰かか	子枝
及つぬる雪一丈成り	白
信言今より床は拂ぬ	貴之
幾夜も其るよほ	桃李
忘るべき	蕉雨
心も	虎白
五	花蝶
悲	夢人

朝乃月すむ	水芝
さ	兎角
以	竹嘴
持	子
風	辰風
人	采菊
又	菊後

白紙從速速

六

志退ハ多クともなす様う那

彌子控次 牧之

糸の世もまきくもき白粉が

里英

空のくも競負くもくもく様

山川

志よ来く世住居りや飯世中

心成

心鳩乃一時ゆきゆ様うが

目本田 里竹

外や世住居りや飯世中

乃外七備 ト之

夕山や口の志くもくもく様

松隣

世よ来くもき命ととくもく

把子控次 宗批

志形く情も様う時斗うも

清明

世よ来くもき命ととくもく

藤河彦時 世英

花の形く垣まね人の栖う那

上中本時 世百

持乃備く世もくもくもく様

世居あ波谷 世之

足伸きハ世もくもくもく様

百之五

一本の志よ世住居りや飯世中

志林

風をたけくもくもくもく様

持子信吉 世峰

世よ来くもき命ととくもく

杉光

影もあけくもくもくもく様

甲子丁四中 麻之

一向や花は日赤の朝朝

舟

酒くらや酔くさちの世帯

さかひ

一の友

人老ゆ負ぬくせーつのは

武め徳谷

目撫

酒籠のふまへつらも入る

初甲

蓮仙

小舟をくさとのさくらも実を

花をくさくらと移る梅川

茶味やさ良教行る通遊形仏

信兼

忌友

嶽表乃行るさくらや難勝

句糸

山嵐を花の七つは月夜

長高

石京は梅こころのしりし

かお全段

梨松

うらちまや給石出る船さ

ともて

白

むの山時かゝるさあし

公英

夕景や思あさむのさる

涼眉

あま出く中出たる男の

蒼流

春の花も人も咲ゆる

魚柵

よの中にかまは梅のさくら

おの梅

文多

あやうきあはもあはる花一夜

は素

夕月の被や山さくら 山

月影まくん様を尋る 快く

心こころも中まま入やささく心 心こころ

心こころ人ひとはあや花ささく西東東 伊丹 東尾

ああ昔むかしは遠く山ささく了 加か 文ぶん

雨あめ晴はるある里の影ささく了 江の貝俣 月

土つちの花は白表の花は 但た 草くさ舟舟

花はなささく文やささく御お様様 江の木 土つち

花はなささく様はさの所はか 江の木 東あ東東

花はなささく山 山 東あ東東

田いの花目めはある山 山 東あ東東

遠とほく静静かり心は射 川かわ板板

心こころも特たまる人も浮世世 大おほ飛飛

音ね折おの片枝はは山様様 白しろ羽羽

山やま寺てらは様心こころも夕アア雨あめ 素す久く仙せん

心こころもある家は心の心も心 糖とう茶茶

咲さ初はつは心も心の心も心 瑞すい宜宜



蘇れんとも涙も少く身花山  
 言花や大名通るはあゝと  
 高のともと舟も湖上様か  
 舟は言花のよすりのあゝと  
 福来と指留るや山ささく  
 花の中宮姫の下成法えん  
 飲るは花意りつと味は味  
 不言は花ささくささく  
 花散やりとも案ふり  
 西海万本  
 素文

墨蝶

麦飯

素吼

北筑

望山

布被

九岡

一道

素文

花散やりとも案ふり  
 不言は花ささくささく  
 飲るは花意りつと味は味  
 花の中宮姫の下成法えん  
 福来と指留るや山ささく  
 舟は言花のよすりのあゝと  
 高のともと舟も湖上様か  
 言花や大名通るはあゝと  
 蘇れんとも涙も少く身花山  
 花散やりとも案ふり  
 不言は花ささくささく  
 飲るは花意りつと味は味  
 花の中宮姫の下成法えん  
 福来と指留るや山ささく  
 舟は言花のよすりのあゝと  
 高のともと舟も湖上様か  
 言花や大名通るはあゝと  
 蘇れんとも涙も少く身花山

上毛高村 万戸

紀伊之橋 九泉

徳安和向 崇山

徳安 破中

徳安 東麓

徳安 本姿

徳安 一徳

徳安 化蝶

徳安 里朝

徳安

徳安

けり阿る人ならくやさく橋  
柳枝  
きつふ吹くうれうを枝  
風子

山さかす約々月毛お薙  
里風

烟たううきき帯のま風  
極楽

姑射山へ入るとさよふ人  
柳枝

あまの宿ふまふあふ  
里風

馬の橋る初よきまねり  
春橋

花のまや姫とまねり橋  
白雲

世つらや占めと磯南ふり  
素風

まやあまふまふあふ  
丹

人きくぬ山子まき橋  
班狸

かめくまんさくくもとの  
白紙

あもくま文裏や渡月橋  
羽角

座くまれあまの夕心  
一柳

あまのゆきを橋もさく  
花

伝分林

級田

羽角

あまの宿

あまの宿

あまの宿

あまの宿

あまの宿

八

むらさきの上人世す人

甲子三の市 一古

境の庭に梅をとりて遊梅

梅の長 是玉

形玉と夫の玉乃梅うを

車南

城の女といふ梅をみま

古冬

をきく梅はとを遊さる

李風

梅をとりて遊梅の所あが

江戸 郊七

の梅をとりて遊梅を啼

江戸 松戸

みくちあや十年二十年

梅の長 忍中

こゝたる梅をとりて遊

梅の長 玉

アとの梅をとりて遊

梅の長 法

おまの孫のまはり山さる

梅の長 春

山畑をとりて遊梅

梅の長 池

木の庭をとりて遊梅

梅の長 利

忍びは二月の影さる梅

梅の長 雨

透し忍び梅を二日月梅

梅の長 木

聖日何くとも情や夕梅 文和  
 夕日さくを暮るりさく 田口  
 経舟ハ梅乃中 不格  
 船とらん海山さく 鹿山  
 月の出く又 李亨  
 眼 侯景  
 日と入る山又 栗之  
 高山 上毛大系  
 出 藤原  
 出 梅子

咲并く 江戸  
 人を 一甫  
 花さく 甲  
 仰 紀子  
 日 佐加  
 切株 佐加  
 人 佐加  
 吟 佐加  
 梅 佐加

横吹くをるはくふちまはるめ 不木

有漏り漏の境はくまを横 吐き

何事もや花をさるたきを衣 不木

こころを起すの横や鞠るさ 班鳩

又もさるをく延く令かむ 不木

三人のたをぬるさるをの真 不木

さるをさるたをぬるを横 不木

初さるを山部の村をぬる 不木

木糸の眼をく横 芥山

夕日さる寺や横の下阿る 鬼笑

おとさる山とつる横 依山

さるをぬる包くぬる 不木

さるを山を目をぬる 庭山

さるをくの中を横 春山

けりさるを白ぬるを横 花休

阿まはるぬるをさるの白ぬる 仙梨木

かこくりの花をぬる 雀翁

信が不慮連  
月下坊

平松寺

聖徳を仰ぐ

長あをる

橋くく月谷川移りしる  
高やさくく根をりきり  
星山

眠たしあまのつ子のまふもく  
水。 廣砂

阿まのまも思くくくははは  
江の岩根 桂石

思ゆらふもの思ひされくく  
甲の山 素菜

さくく嘆道木のおくや白のき  
輝川

橋嘆くまゆのきくく山家  
那の 維清

花乃山移橋村とはきき  
三の塔 階車

船つまきく山家乃山さく  
本が山 素山

み所もまきく山家乃山  
鳥東

花乃欲くく山家乃山  
種好

あまあてく山家乃山  
如雷

猿人のまきく山家乃山  
雁の

君本あてく山家乃山  
竹の

思くく山家乃山  
好古

あまくく山家乃山  
文士

さくさく花の葉よるる啼

鳥の聲也  
菊羽

能くわく横をともく夕景

志云乃柳  
苑縣

もよおしてハ夕暮るをよらくこ

鳥の聲也  
方鳥

少くともやう様よ阿らう夕景

鳥の聲也  
嶽左

多うにきよのくもくわらと志景

鳥の聲也  
右竹

勢のきよくさく霞や志景

志云乃柳  
葉丈

淡路や花もりのく新くま

上毛要  
白飯

左のくまの志のくもくわら

鳥の聲也  
葉丈

花のくまの志のくもくわら

鳥の聲也  
出左

世の中か志のくもくわら

鳥の聲也  
阿石

白羽のくまの志のくもくわら

志云乃柳  
龍山

さくさく花の葉よるる啼

志云乃柳  
白輪

鳴初めくまの志のくもくわら

鳥の聲也  
舌柳

在りや四五新なりぬ志の鹿

鳥の聲也  
春睡

果しけりや世のくもくわら

鳥の聲也  
眠和

お色菊の志のくもくわら

鳥の聲也  
魚友

繚々ふ浦もこころの想ふ、車大

柳町の古きくもこの屋敷 柳中 白木

あこがれを思ふ中のおき屋 柳中 物籠

花子とて氣さうりけぬ女が 柳中 此君

新あそびの道ありて 柳中 孤柳

左のや橋のさか 柳中 欽河

ふね 柳中 枝鳩

夕月の西照ふ 柳中

池の橋 信忠 大酒

花と照り 加あ 尺艾

筆すぬ 加あ 三佛

三葉の 江の里 歌籠

里 江の里 大橋

初 柳中 五舟

泳入 柳中

花の山 大坂 遊竹



事ある中は通つて鐘の音 長馬

煙火の如く比ふ葉白の暇多し 英

押すころの名は子孫事とて 竹

庄屋の事をばけり少ねは日月 高

草とてすれども花は玉花 英

管の音をたてしや夕梅 信宗 夜祥

嗚呼さくらさくら世の何れも 志村久義 豊浦 濱之

花さくらとて花の寐顔の乞食が 業甫

葉飯の如く抱くもかきとく 玉尾

大木小木とて手さきは丸瓦哉 碓之

酒まじりて人構りもは飯系人 和吹

嗚呼さくらとて花の海山うね 上毛極楽 素菜

吹折まじりて梅咲くも春は未 白井毛公 茶忌

月はいづれ住かすもくち梅 東谷四 米尾

花さくらとて花の寐顔の乞食が 米丘

風も行く影も来たりて横が 、荒口 米元

山後平のささけ同んささけ 、横室 三笑

船橋の浅草ハハの舟のり 、上り 舟佛

多晴や照んくはるさな 、猫村 日角

一面より花は白の静 、相生 孝信

ささけ候きや別天殺日 、 雪川

病ふかゆりさな 、 得牛

まを四のりるを落し 、 宗徳

ねくまぬさな 、 麦四

飲あさく 、 素ち

あした 、 米砂

中 、 了江

寺涼 、 灌圃

暮 、 梅三坊

花の風流の心 、 豊信

吹 、 沙生

夏より冬へゆくゆくいふはさるる花

△廿五  
能くする木  
蚊儿

ふと又とて思

花ふらふ松

花の陰まはるる花と成りて

可十

心もぬかりなきや花は山

文元

月も深き横の枝ありて

方云

衣もろく衣の深き里に

有之

心を集めてと花は木を巡りて

榎葉

花ももてとて花はまはるる目有

文九

花よ叶ふ花やとて花は

競巴

花の人を尋ねて花を建てては  
花の心も花も二つの花は  
花の友も一りや花も似て  
おく山の花も花をたふす人  
左史

奇仙

初より花は枝をまはるる山

二翼

花乃花は花をまはるる花

大酉

花は花を花は花は花は

白老

花は花は花は花は花は

習雲

花は花は花は

五月月あけ 頼子草のつふ  
 春うさふ(のちやあふふ  
 梅の枝はさきほろろ  
 まつらもいさぎぬ小初の新  
 三河輪廻のあつたうとをいほ  
 妻の子乃夕妻あふはせ  
 何となく舞し事も舞え終  
 頑よりあふあふは下紐  
 窓の枝あゆ風の徒然り  
 西 老 酒 翳 老 酒 翳 老 酒 翳

桂の房乃うのふ月新  
 かくとあふもあふあふのあふ  
 御侍女中あふあふあふ  
 極まりあふと柳のあふあふ  
 葉の葉あふ新あふあふ  
 西 老 翳 老 酒 翳 老 酒 翳

六下略

明あふあふ人もあふあふあふ  
 九阜

見あふあふあふあふあふあふ  
 一のあふ

甲あふあふ

紙あふあふ

花さうまはなをくくす都子 漢甫

か咲くあなを癒ゆるる 化良

菊をなすくはるふら那 不來

尺事形を又たしきも梅ちる 席明

春梅や一ふ志のそ尾を 栄三

むのうま出るとまふ藤行が 鏡平

念嘆て雇人おろし葛坊 弘遠

見新ハロのまよはらを返さく 三紙

月和月しう一野梅のまを 保久三

やうう木の梅さくまやうらき 為彦

ふあふうつろ梅を和ふ人 紫雲

咲きまふ人乃命を和ふ人 佰個

朝山や旅子返さくまを和 俊久

梅さく梅まふまを和ふ人那 三三

朝戸のあまのけさくまを和ふ人 龍泉

ふあも控ておろし花乃友 東麻

酒さくまを夕梅と和ふまを和 六柳

花や花あふふらの松の物 松生

らんらん月夜松の文おけり 松声

赤松や花あふふり松の月 松弓

朝と夕と赤く白く松の影 松洞

朝と夕と赤く白く松の影 松洞

朝と夕と赤く白く松の影 松洞

朝と夕と赤く白く松の影 松洞

花景のほろむ松や松の影 松泉

上野松尾

松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

花の影あつて松の影 松泉

山崎乙

松泉

松泉

松泉

松泉

む様や菰きこへ信のめくろ  
まぬくむ様よまのまふれ  
作言の報子つまこを  
み白くあまきぬ人の声

石原 如信

丹波 全尾

女 芝草

若子 忍志

惜しやう歌をもかへ朗  
ほのあやむきぬこは様  
あふともあふまのま  
ちれをわぬぬくまは眞

奥平仙臺 福二

城山

梅窓

古柳

心の世はまよの歌や林を  
かみけふ六歌の証やま乃山  
古道はまをまぬくも様う那  
朝歌のまよ山さくくくく也  
まよまよまよ志のまよ山町原  
まよ中一人まよくん山さくく

弾子

東傳

云渡

石原 福二

紫石

芝草

雨中惜を

月にせしよはまよもするなま乃家  
ちる様やまよ家のまよ味

石原 芝草

三河 福二

福二

谷川や各ハ溜りくむの陰 菖草 菖玉

月影のまゝく見ゆし雲の雲 裾之

さきんはヨリて甲けいさしり穉 玉露

紫の戸や花のまを吹ちり穉 若仙

山さくふ家より先ゆ人の身 蛙各

花七の石ふ籠り皆散りてを あり

新の月をきき山橋咲ゆらん 三十

カク 雲神といふ山にあり

まもまことさかき神やま橋 まがみ 雲橋

橋を陰と邪集り鏡の那 上毛 雲丘 笑魚

生船もむま城の心時かま 二世 良田 兎月

馬をゆぬ坂より深界のま橋 志瀆

花をまゝく噴りくまをさるる 尾名 丘 夏橋

詩をくくりてさくくまをま橋 赤丘 杵白

花をまゝく噴りくまをさるる 世 橋 花橋

花をまゝく噴りくまをさるる 丹波 橋 橋

花をまゝく噴りくまをさるる 丹波 橋 橋

花をまゝく噴りくまをさるる 丹波 橋 橋



一町のる走るまきけり梅 上四 冬草

けしきよ白根しゆりやうま 三井 大橋

まふまをそれたしみの秘 かみ倉 因馬

も宗さやをもよほくくふ生色 巴川 巴川

碎解のりもあましくさか梅 山口口 古光

古きあけけり塚りふとまお下 善風 善風

けしきよまき世をけり一庵 如水 如水

入相す耳やうらたう山さく 如牛 如牛

悪於と子成すけけよをん 村野 後鳥

人挽ぬ花とさくくよ東山 竹里 竹里

まをまきまきく蝶のね 中 中

しかし早の梅よがまに ト子 ト子

けしきよ梅すきめ 山橋 友光

まきまきく花ありあり 里山 里山

まきまきく梅は咲のきく 集 友成

梅のほくく 長 長

蕨のきくすゝめよらとやあそぶく

よらの中は珠子のくも

牛はまきとさるもいぬあむ月かた

くればし一船の初原は公汲

初原

はるきんとすふふちを構うま

はるきとす

五牛

ふれちるふ構う中の短う那

はの短木

首原

新のあぢもくはの人のき

上毛下田

鳴鳥

梅藉るをむんくくくくくくく

七か石女坂

梅非

赤きやあ風はふきくく

紀伊三田

波亭

燈のさくくくくくくく

雪色

初稿のさもけくくくく

尾原

尾原

梅のや山くくくく

白狼

さく枝よ人きくく山おはる

一眠

人いひさあふくくく

茅里

花の輝おるふ人を追ふ

仙代

仙寺

呼吸梅をくくくく

呂柏

古城のさくくくく

高家

ちりあむとたよ大みはもり  
 酔はるのあくと本一芽山  
 花のを牛鳴をやうか那  
 何よよあもあかき一  
 花よ物く人よまんと  
 花と月清あさあさうふ  
 花様やんやうももも  
 岸は吹矢の山さく  
 花よあさう花もあさう

肥後熊本  
 七海  
 江あえ報  
 り柳  
 乙葉  
 流あまき  
 白志  
 一炊庵  
 飛文  
 紅船庵

ちりあむとたよ大みはもり  
 酔はるのあくと本一芽山  
 花のを牛鳴をやうか那  
 何よよあもあかき一  
 花よ物く人よまんと  
 花と月清あさあさうふ  
 花様やんやうももも  
 岸は吹矢の山さく  
 花よあさう花もあさう

肥後熊本  
 七海  
 江あえ報  
 り柳  
 乙葉  
 流あまき  
 白志  
 一炊庵  
 飛文  
 紅船庵

秋さくらやまも層々くさ拍子

秋さくら

伊能

あまのつらも重なるほろむおの

あまのつら

隣車

御さくらもあまのつらもあまのつら

御さくら

魚翁

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

完来

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

午心

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

大江丸

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

吟詠

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

松琴

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

竜洞

待しゆくもあまのつらもあまのつら

待しゆく

宗徳

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

百忍

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

西渡

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

志守

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

五英

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

妙保

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

待紅

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

玉房

あまのつらもあまのつらもあまのつら

あまのつら

梅那

御軍よりなる系する文様

後醍

羽振つよく鶴ねむるを逆様

徳島黒島 政卜

天の戸やさしくよき色

波井

和様より真のくすく揚家

板江

やまの梢のむのちみ

河川 布遊

御務のむはなれや呼迎

玉史

二夜庵百韻一頌

鈴くの鈴く禁くを巻

赤松 久松

南宮よりあつた二月

松月

絞賣信紙まきむゆき

糸度

十人そとに袖つねり

金巻

並や何れを森の花森絶望

紗玄

一本作りの新くぬ月

百道

芝草も種丹板も浮浪

白糸

まろかんちりりし程の影

浙江

かぬくの甲十の色香拵

桂屋

うみつみりし紙の文

風化

唐程口平はく又て西遊記下

寸鹿

こふくふくふくふくふくふく

波嘯

里人の横くふくふくふく

微日

早中一りて桂子葉なる

曲阿

唐程口平山集詩書つて免

和養

狗子杖しく案子然子

理玉

王院乃けり未陰れも怖し

五風

彼中七りびつてあはれ

惠中

風雪の志しくちも白く

嘉菊

老よるる一四乃山石

右麻

雨は赤んがけく神楽

梅人

梅色中一花もくもい

夢撰

竿舟の小くよゆ中尾城た

梅甫

猿志くぬくき中はる

五計

清多中よふれぬまの

寸靴

杉城一城の雪は小坂下

素更

比巴代中たぐくふくふく

成良

黄骨一その巨唐留載く

寸木

高れりおのりおのりありて  
 細尾をいぬく致しきふ  
 持あよ合飲の暇や移りし  
 今昔の程より見えし  
 系酒太垣衣のまゝやわ  
 本戸より比な陰やうさ月  
 橋をさの陰り堀きし  
 鴨のゆき移りし  
 山くたもあふのたぐり店借し

生紙  
 菅枝  
 萱父  
 文考  
 棚角  
 菊明  
 橋丸  
 江風  
 船吟

縁草抄を記す詠系 一

初さうし様を撰ふりおが  
 ともけい腕のき何れおの乾  
 ちほくは雲宵の志しき  
 霧うさ様と蝶のつまらぬ  
 少少もさくまをよみぬ  
 ちかけのまも様をの清き色  
 花のなる結い清きうさハ小

おのり長井 雪  
下総のあり 文考  
典のほり 春原  
 樞仙  
 五作  
 玉之  
岩崎平 栄主

けふは花をよみてはまきくも山 高帆

松林を寄よるとまらや花日記 泊星

花さくらや借る楽神ふ都人 且松

花は藤くつ函よりいそ食長衣 金塚

書もあふ花は中なる一ツ家 江戸 紗之

酔人の鳴やまぬ乃とふ口 越中 誓口

都よりよくつらとぬらや初様 甲斐路中 生の巻

折々の花は管人もねハ来ん 梅五

情より一花のくく路の小葉 彭良

花はまきくもよとたつ一室禁 平島 如雪

何とぞ花のわは山とぬ山とく 神笛

きふも来くもよと世志の横水 和名

鳴のまきくもよとつらとつら様 孔阜

まにまに花は折る一花花 和石

あふ人乃月より花は折る様 和名 和石

人を花おとすかくさぬりうれ 和名 和石

醒きく人よと何とぞ花は折る 和名 和石



菱沼〜涼舟橋のまゝ

涼舟橋  
木舟

かきみねの春をとり〜橋橋

奥の仙臺  
高仙

〜おはき〜姫の袖〜山橋

高角

おとしきや船橋つと〜橋橋

飯角

さ〜花よ御うさ〜橋橋借

和睦

橋川岸のちり名取

右桑

〜川〜名取法衣〜眼〜れ〜

女  
作和

夕暮や橋の山乃御

仙臺

津清〜橋のと衣魚取

宗和

山口やあまのり〜舟のゆ

白鯉

就燈のよ〜花〜さ〜

香色

あ〜ぬ〜も〜君〜舟〜橋〜舟

江  
舟子

菱橋〜人〜舟〜舟〜舟

江  
舟子

〜色〜すれ〜舟〜舟〜舟

四河

舟〜舟〜舟〜舟〜舟

百花

舟〜舟〜舟〜舟〜舟

似花

涼舟橋  
木舟

三十一

新編... 或ハ取... 山

補月庵

石... 海... 女

山... 子及

花... 逸澳

夕... 東向

月... 双石

海... 魚一

紀... 魚一

花... 魚一

ま... 仙家

ま... 埋木

竈... 石父

海... と負

海... 鯨牙

海... 東河

海... 画原

花より賑わすよきなれらう那

花より賑わす とも哉

明くもやゆめさうあのみなさう

ゆめさう だう

あふしあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 君花

人なき花の六日の野山が

野山が 白老

さうもあやうきよと人世の人

人世の人 一古

花よりあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 尺檜

花の歌山をよけりあふしあふし

あふしあふし 芥舟

あふしあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 楮人

さうもあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 淡交

さうもあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 燈房

さうもあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 権葉

さうもあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 不玉

あふしあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 富之

あふしあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 五嵐

あふしあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 梅中

あふしあふしあふしあふしあふしあふし

あふしあふし 凡争

再集終

白菊ふ雪の夕に廊を  
梅  
 糸下や舞の裾よりさるる  
五井  
 お山や人ま川色の邊さるる  
昂山  
 くれしやう庭を様のりね  
あト

清やこのほ世はふと編あす  
湖  
 さくさくさくさくさくさく  
河丁  
 掃や鏡衣のねすさく月つ  
清志

風さくさくさくさくさくさく  
全

表八句

さくさくさくさくさくさく  
御中  
 田螺年なま見な色  
東  
 細衣中になまの節をねく  
尊  
 おとくさくさくさくさく  
新  
 大紋も袴の奥よりさくさく  
雪  
 頂もさくさくさくさく  
雪  
 かくさくさくさくさく  
雪

草と火の飯乃種つて六丁子

長

古下略

花子多き色に禁苑の盛れと方り

大旗

横咲く世り種さるる其名赤か

長

静くもやあまの星の火縄店

東宮

みや川へいふまゝに二百乃種もふ

多義

百もまも種らんさるるやあまの星

北海

をみりてさるるのまゝかゝるる底か

公楊

海く香をとつていふ山さるる

里秀

朝舟のしほをきくさるる由後の心

魚子

水音のしほをきくさるる庭の心

馬牛

嗚る小懐旧乃情のみせらるる

西把持子

孤石

あま浪や破山さるるちるさるる心

雨夕

花は葉の心のみをさるるさるる心

草花

形影の柳とあまの星さるる心

朝友

心を抱阿茶屋酒よ人や酔

探幽

まを誘ふ裾踏よりさるる心

探幽

阿婆のやぶらぎふくき動く  
 夕鶉啼やきつふき山さくら  
 初人の起しあし山梅  
 けしき梅より奪ふ山家  
 ことく梅人ききらとゆ梅  
 梅ひやさくら中の縦毛纏  
 花一本にそはら梅吹まらと

又唐

紅良

池吹

儿臙

生向

采高

春時

けしき梅より奪ふ山家

在鞍鞍 雪子漸

山梅ちみかたりみり梅子色  
 家らちや多るふ雨の梅色  
 るの梅衣志るまら白ひらと

真如

江西浦

瑞蓮

江戸

苦菜

梅もや友梅ふりの秋風  
 家の花人もまらいとす  
 茶のくそよ木のさき出さる梅  
 初さくら柳乃まきと解きさう  
 山さくらかき梅くく梅まら

信安

柳花

杜草

凡化

如風

又那

しらつとくむの道よむきさ、  
事

ま川風はらちくお言や山橋  
流志 柏庭

世はくくろあま森朝の借る意  
持ぬ 十海

しらつとくむの道よむきさ、  
上毛 初雪

十植乃人の世もやむる後、  
心雪

る世一若宮橋より此斜、  
玉交

若宮とあまむく女の長羽織、  
字明

夕常やしきののくくろ花の波  
安中 暮中

あさくらとあまも月夜も休るな  
中宿 秋我

花よ終えほ色くくろ依る  
竹保

くろまひるあの下も新夜ぬ  
かみ 石堂

夕さねは海静まうぬあのを  
伏見 可丸

おとあや橋よりくくろ朝の月  
金免

山さく女乃酔も怪るさ  
縁圃

さあつとくむの道よむきさ、  
標價

あまむきさものくくろあまの声  
信 岷山

典考一ノ三  
扣角

おろしき人々様も片苗字  
らうよ何れもくまの梅うれ  
有隣

あはれも人の抱ふはま  
諍丹

さうは何れもかたけくあはれ  
日峰

ハ丁のさゆりもあはれ  
芦雁

朝来やゆりもあはれ  
掉音

夕様もあはれもあはれ  
唇風

花もあはれもあはれ  
五六

巡るも何れもあはれ  
五芒

花の中もあはれもあはれ  
虎心

風情もあはれもあはれ  
木欠

あはれもあはれもあはれ  
免文

月の様もあはれもあはれ  
免角

花七の中にもあはれもあはれ  
五白

あはれもあはれもあはれ  
都多

あはれもあはれもあはれ  
南来

あはれもあはれもあはれ  
松登



暮らぬむらさきのうらみ

朱弱

初さくら啼らぬ人の世

五粒

花さくらほほえみ

等喙

花と啼中の二つ

生花

まの橋渡も何となく

芹香

むのさくら家と

南華

花は夕やきの

赤遠

ねしやあし

馬橋

蕨買と葉の

菊後

花より

歌雅

度さくら

二雷

花あけ

空夢

咲き中

柳山

眼澄く

杜桂

月影

何心

足し

甫尺

朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	春 十 日 佛 の と た し あ は れ す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す
公 徳 心	梅 李	左 律	竹 風	菟 江	新 賀	葉 子	持 終	應 姜	

梅より初暁を初く衣冠を目かす 山より 大丸

醉 機 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	破 山 や ま を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す	朝 暁 を 初 く 衣 冠 を 目 か す
唱 山	宋 忠	斗 雪	春 報	朝 暁

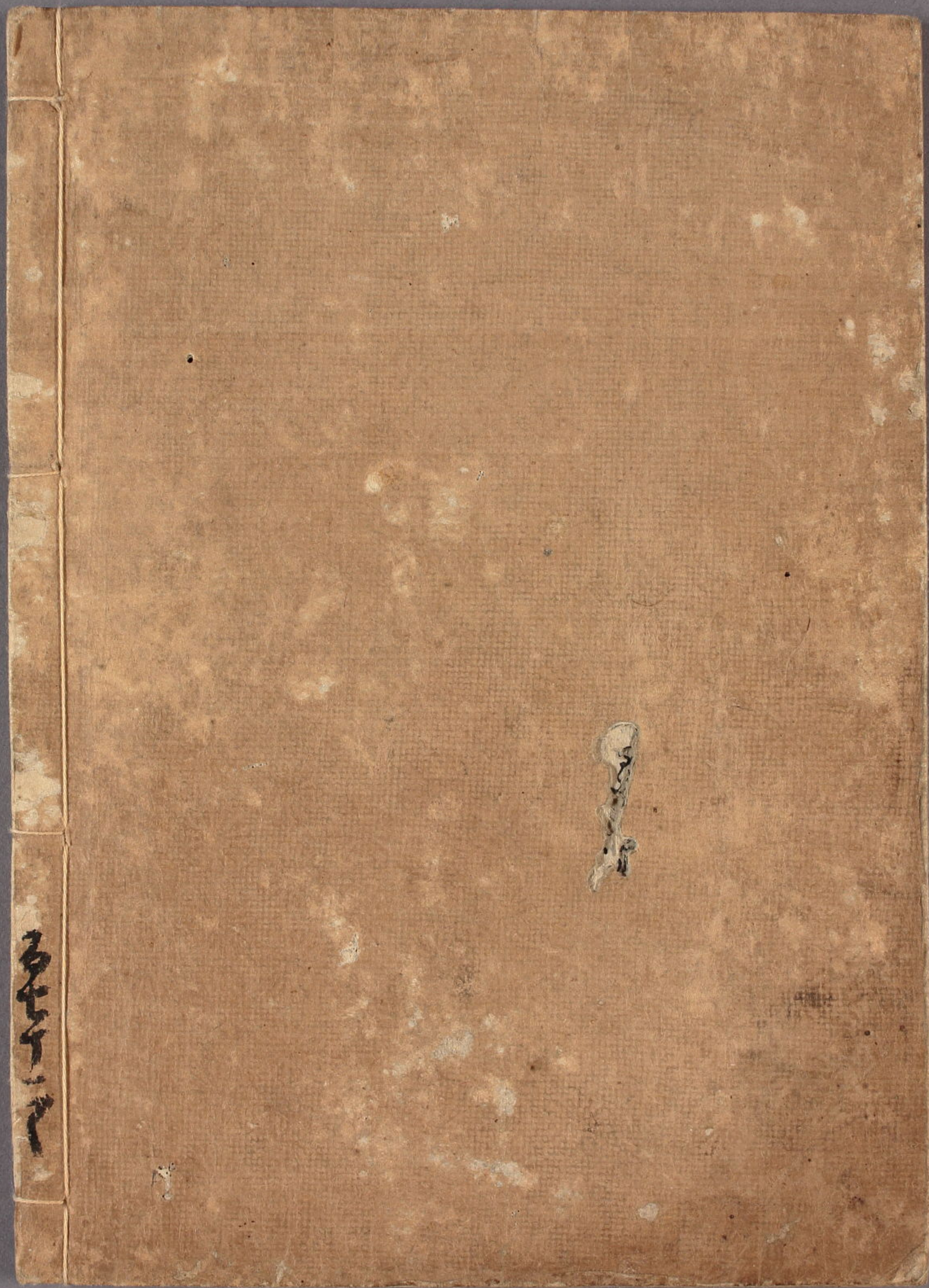
何れも初暁を初く衣冠を目かす 長道

るまゝぬくまふりまきけりう那 土卯  
恵よりくく横よをるむをふ 松蒼  
ワるまゝぬくまふりまきけりう那 一の董  
夜ふりくく横よをるむをふ 子良  
通さくく一木りもとの雪ゆか 栢茂  
ふりまゝぬくまふりまきけりう那 百正  
ふりまゝぬくまふりまきけりう那 乙道  
ふりまゝぬくまふりまきけりう那 余文

洛東 芭蕉堂 藏板

留 上吉徳久  
笑市積乙風





五七二